語り継ぐということ

中田政子

市民団体「神戸空襲を記録する会」代表。空襲体験集の発行、慰霊碑の建設（神戸市兵庫区・薬仙寺）、空襲・戦災の遺品収集（現在神戸市立兵庫図書館所蔵）、毎年の神戸空襲合同慰霊祭、空襲跡を歩く会の開催、小・中学校での語り継ぐ集い、全国の都市で活動する記録・語り継ぐ会との連携などに取り組んでいる。今回のシンポジウムでは、市民団体による「語り」の経験を「戦争の記憶」へのアプローチのひとつとしての位置づけを検討する。

こんにちは。ただいまご紹介いただきました神戸空襲を記録する会の代表をしております中田政子でございます。東谷先生のお話は本当にわかりやすかったですね。理路整然と順を追ってお話ししてくださいました。東谷先生は実は私の娘ぐらいのお年でいらっしゃいます。あんな先生が大学の壇上にいてくださるのだと思うと、もう一度大学に行きたいなと思います。森先生のお話と東谷先生のお話と私の話がどう結びつくのか、よくわかりませんが、ここに来いと呼ばれまして、出てまいりました。ちょっとお二人とは変わった話ですが、皆さんにリラックスしていただければいいかなと思いますので、しばらくお聞き願いたいと思います。

今日は甲南大学に来るということで、ここに来る前にすぐ近くに住んでいらっしゃる九〇歳のご婦人のところを訪ねてまいりました。「あなたは甲南大学に行って何をするの」とおっしゃるので、「神戸空襲のことを話せと言われています。先生方ばかりなので、すごく不安です」と言うと、その方が「あたしたちの代表なんだから、しっかり話してきてください」と言ってくださいました。九〇歳の方にエールを送られて、今日ここに参りました。

神戸空襲を記録する会というのは一九七一年に発足した会ですので、もう三八年の長い歴史があります。そこに私がずっと関わったわけではありませんけれど。これは戦後二五年、四半世紀たってやっと、日本のいたるところで空襲体験者の人たちが何らかの形で空襲体験を記録として残さないといけないのではないかと気づきました。そして、東京で全国の空襲を記録する会が発足して、神戸もそれに呼応した形で誕生しました。

当時、神戸新聞が初めて読者に空襲体験を募集しました。私の母はそこに投稿した一人です。一九四五年三月一七日未明の夜間大空襲で、兵庫区の大輪田橋で地獄の体験をしたという投稿が目に留まり、新聞に掲載され、この会を発会する発起人の中の一人に入れていただいたいきさつがあります。

その後、神戸空襲を記録する会は、君本昌久という物書き・詩人を代表にし、神戸新聞の首筆である畑専一郎など立派な方たちの後押しがあって、神戸空襲を記録する活動を三、四年の間に本当に怒濤のごとく、ものすごい勢いでいろいろなこ

とをしてまいりました。

例えば『神戸空襲体験記』(1)があります。これより前にも一冊本を出しているんですが、その当時の空襲体験者の体験を集めて物語風にまとめた本(『神戸大空襲』(2))を一九七二年に発行しています。それから、市民の募金により兵庫区に空襲犠牲者の慰霊碑を建てました。それから、空襲戦災を記録する会の全国連絡会議の第五回大会も神戸で開催しました。それから、遺品を集めたり、慰霊碑ができましたので、空襲犠牲者の名前を集める作業も一九七八年にはしています。そのときに呼びかけましたら、三六四名の方のお名前が集まりました。慰霊碑にその名前を収める作業をしています。そのときの神戸新聞の記事には、「おそらく神戸では一〇〇〇名の犠牲者の名前が集まるのももう間もなくだろう」と書かれているんですね。ところが私たちの会は、その翌年は四六名集めるんですけれども、ちょっと失速してしまいます。

それから、『日本の空襲』(3)という三省堂の本の第六巻・近畿編を完成させるためにも非常に協力いたしました。それから、炎の遺品ということで空襲に関する遺品、鉄兜ですとか、寄せ書きをいただいた日本国旗ですとか、国防婦人会のたすきですとか、いろいろなものを集めました。最初に集めた八六八点は、神戸市立中央図書館旧館(4)に一応戦災資料室をつくっていただいて、そこに納めています。それから、『炎の証言』(5)という教育ビデオ、大空襲の記録を制作するのにも協力しました。

そうこうしているうちに、私の母をはじめとして、君本氏を支える人たちが、つぎつぎ病気で亡くなっていきました。君本代表もだんだん弱気になり、私はお手伝いしていたものですから、「あんたが代表になるんやで」と言うようになりました。でも、私自身、体験者でない者がいったい何をすることができるのか。歴史を研究する人間でもない自分がいったい何をするのかというので、ずっとお断りというか、しり込みする状態が続いておりました。

阪神・淡路大震災がありまして、私自身、自分は人の役には立てないのかなと、この震災でもどなたの役にも立てない、どうしたら私は人さまのお役に立つことができるんだろうと考えたときに、空襲を記録する会をお手伝いすることで何かのお役に立てるのかなという思いが芽生えてまいりました。それで、震災後、私が代表をしなくてはならなくなってしまったわけです。

私がなぜこんな身で代表を引き受けたか、まずは私の母親の体験からお話ししたいと思います。私の母親は、先ほど申しましたように、兵庫区に嫁いできたまだ若い妻だったわけです。一九四五年三月一七日、私の姉がやっと一歳一〇カ月になっておりました。その子を連れて、病気のお舅さんを守り、自治会の命令どおり、防火用水の水を汲んでは消火していました。一生懸命やりながら、もう駄目だと思って子どもをおんぶして、大輪田橋のほうに逃げようとしました。大輪田橋はその当時としては珍しい、運河にかかった立派な橋でしたので、そこに行けばなんとかなるだろう。水があるし、その橋の下に逃げ込めば助かるんじゃないかと考えたのは庶民と

しては当たり前のことでした。

それ以前に、東京に空襲がありました。それから名古屋にもありました。やはり東京も隅田川でも悲劇がありました。名古屋でもたくさんの庶民が川で死にました。ですから、もし水のあるところに逃げることが安全なのかどうか教えてくれていたら、そんなにたくさんの人が大輪田橋に逃げなかったかもしれませんが、大輪田橋に逃げました。母は橋の下に潜りたかったんですけれど、その途中で将棋倒しになって気を失ってしまいます。皆さんもご存じの油脂焼夷弾のせいで、運河の水の上に炎が走りましたから、橋の下に逃げた人たちは本当にほとんど全員蒸し焼きになってしまいました。母は橋の下に逃げられなかったものですから、橋の上で気がつきます。

母の上にたくさんの遺体が乗っていまして、それがみんな燃えていますから、このままでは駄目だと思って這い出します。背中の、もう息もしていない赤ん坊を下ろします。抱きしめたいと思うんですけれども、母の両手両足は火傷でずるずるで、広島の人たちと同じような状態ですね。ですから、万歳しないといけない。わが子を抱っこしたい。わが子をなでて、もうここで一緒に死のうねと言おうと思ったんですけれども、それができない。

子どもの空を優しくなでて、ここで死にましょうと念仏を唱えていたら、また爆撃がありました。母は橋の東のたもとにいたのに、西のたもとで気がつきます。白々と夜が明けて、地獄のような光景が大輪田橋に展開されていたわけですが、母は小さな遺体を探して、うちの子かなとひっくり返して見ます。ああ、うちの子でなくてよかった。またもう一つひっくり返して見ます。ああ、うちの子でなくてよかったと思ったんですけれども、「小さな遺体はあまりにも惨たらしく、それ以上の遺体をひっくり返す勇気は私にはなかった」、母は私にそういうふうに伝えました。

しばらく行って家族と出会って気を失ってしまいます。父やおばたちは、なんとか母を助けたいと病院に行くんですけれども、神戸の震災のときと同じですね。助かりそうにない母ですから、病院で「もう来なくていい」と言われるわけです。どこの病院に行っても断られてしまう。やっと着いた病院で、「ああ、その人、そこに置きなさい」と看護婦さんが言いました。もうすぐ死ぬから、遺体がずっと並んでいるコンクリートの廊下の端っこに寝かされました。むしろを敷いただけ。一九四五年三月一七日のその日はあられが降って、とても寒い夜でした。父やおばたちは、もう死んでしまうなと思いました。先生の診察もないまま三日三晩。しかし、母はどういうわけか生きていました。

先生の診察の番になったときに、一番最初に、「先生、お腹の中に赤ん坊がいるんです」と言いました。先生は笑って、「あんたの命が助かったのが不思議です。お腹の赤ん坊は諦めましょうね」と言われました。それで、母はたった一人のかわいいよちよち歩きの子どもを失い、お腹の子も諦めなければいけないと思って、ただ病院のベッドの上で寝ておりました。消毒ぐらいしかしてくれない日々が続きました。その途中で

も空襲があったり、艦載機の攻撃があったりして、ベッドの下にもぐり込むだけの生活でしたけれども、じっと寝ているとお腹の赤ん坊が母のお腹を蹴りました。そして終戦後、九月に疎開先で生まれたのが私です。

私はいつ頃母に聞いたのかわかりませんけれども、私の母の両手両足にはすごいケロイドがありました。ケロイドというのは皮膚が引きつって毛穴がなくなって、つるつるしていて、触るととても気持ちがいいんです。私たち子どもたちはお母さんのつるんつるんのケロイドを競って触っていました。そして、お母さんの話を一生懸命、「で、お姉ちゃんの遺体はなかったの？」「じゃ、あのお墓の中にはお姉ちゃんはいないの？」「誰もお姉ちゃんの遺体を見ていないの？」、私たちにとってはすごく疑問でした。「お母さん、いつかお姉ちゃんは私たちに会いに来てくれるんじゃないの？」、地獄を見たことのない私はずっとそう思っていました。

母は三月一七日になると、私たちきょうだいを連れて大輪田橋のたもとに行きました。震災で壊れてしまったんですけれど、当時は母が「ここだよ」と言ったところは黒く焼け焦げて、コンクリートには欠けたところがありました。「ここに私はいた」と言いました。そこでお線香を供えて、お花を供えて、お祈りするのが私たちの年中行事だったわけですね。母は決して私たちが姉のことを忘れないように、いつも「あなたが高校生になったんだから、お姉ちゃんは大学生になったのね」というふうに年を数えて私たちを大きくしました。ですから、私には、お姉ちゃんに会いたい、お姉ちゃんはどうして死んでしまったんだろう、私たちと一緒に生活はどうしてお姉さんには許されなかったんだろう、という思いはずっとありました。

三月一七日にいつもあそこに立つのは私たち家族には当たり前のことでしたから、「慰霊祭のお手伝いなら、先生、できますよ」というのが私の素朴な思いでありました。ですから、皆さん、「神戸空襲のお仕事をされて大変ですね」と言ってくださいますけれど、家族でやっていたことがちょっとスケールが大きくなって、「来てください」とお出しする葉書がたくさんになって、少しずつ少しずつ膨らんでいったことだから、私はこうやって何年もさせていただくことができるかなと思っています。

母はいつも、「戦争をしたら、女子どもがこんな苦しい思いを、こんなつらい思いをしなくてはいけなくなる。だから、戦争は二度とあってはいけない」と。私たちには弟が生まれましたから、「この大事な男の子を戦場にやることは決してあってはならない」と、いつも私たちに言っていました。

私が代表になってから、本当に頼りない代表がよちよちと歩くものですから、いろいろな方が助けてくださいます。私たちは三月一七日に毎年、神戸空襲合同慰霊祭をしています。そこでたくさんの方と出会うことができました。

いま私と一緒に小学校にもお話しに行ってくださっている方は、小学校三年生のときに三月一七日の焼夷弾が右手を直撃して、右手があっと言う間になくなりました。防空壕にいったん入ったんですけれど、お父さんが突然やってきて、す

ごく爆撃が激しくなったので、「ここじゃ危ない。出てきなさい」と言ったんですね。もしそこに入っていたら助かっていたかもしれない。あるいはわからないですけれども。お父さんはその前の三月一四日の大阪の空襲で防空壕に入ったたくさんの人が死んでしまった、いいかげんな防空壕の中に入ったがために死んでしまったことが脳裏をかすめたので、この激しさは駄目だと思ったから女の子二人を出そうとしました。防空壕の蓋を開けようとしたときに焼夷弾が右手を直撃して、彼女の右手はなくなってしまいました。本当にろうそくの火で、電気のこぎりも何もないところで、普通ののこぎりでゴシゴシと手を切られて、手術をして、つながった命です。彼女はそのときに命をつなげたわけですけれど、一緒に防空壕にいたお姉ちゃんは亡くなってしまいました。そのとき助かった命ですけれど、六〇何年たって、おそらくそのときの輸血が問題で肝臓病を発症しました。でも、そんな病気にもめげず、私と一緒に小学校に行って、子どもたちにお話を届けてくれています。

二〇〇五年、戦後六〇年たったときに慰霊祭をしました。私たちは戦後五〇年に大きな形で慰霊祭をしたいと思っていたわけですね。ところが、一九九五年一月一七日に阪神・淡路大震災がありました。神戸のまちは、本当に私が母に聞いていた戦後のまちと同じように何もなくなりました。だから、神戸空襲を記録する会は戦後五〇年という区切りをつけることができなかったんですね。君本代表はそのときはまだご存命で、「仏教的にも五〇年の法事をしたら、もうおしまいでいいんだ」と考えていらしたんですけれども、ほかの仲間たちがみんなで、「やろうや、やろうや」と言った。一九九五年三月一七日の慰霊祭には、まだＪＲがつながっていませんでしたし、お寺も被害に遭っていましたけれども、一〇〇名の方たちが参加してくださいました。それに勇気づけられて、私たちは一回も途絶えることなく、今年三八回目の慰霊祭をすることができました。

二〇〇五年の慰霊祭の会場にゲストでお招きしたのは、詩人のたかとう匡子さんです。いま神戸で売れっ子の詩人です。『ヨシコが燃えた』(6)という詩を書かれた方なんですけれど、ヨシコちゃんという妹さんが一緒に逃げたんですけれど、火だるまになって河原を転げて、最後死んでしまわれる。「オテテ　キレイニ　チテ」と言いながら死んでしまったんです。その「ヨシコが燃えた」という詩をつくったときから、お父さんはたかとうさんとものを言わなくなりました。お父さんは数年前に亡くなられたんですけれど、「絶対葬式を出すな」というお言葉を残されたんですね。

実は、たかとうさんのお母さんがお産だったので、お父さんは女の子たちに着物を着せて逃げるときに知らないものですから、ヨシコちゃんに木綿の着物じゃなくて、スフ（レーヨン）の着物を着せて逃げました。スフはあっと言う間に火がついて燃えてしまって死んでしまった。だから、ヨシコちゃんを殺したのはアメリカじゃなくて私なんだというのを、ずっと六〇年間抱えて生きてこられた。娘の葬式も出せなかった父親が、どうして自分の葬式を出してもらうことができ

るかというのがお父さんの思いだったそうです。

本当に普通の人たちが、どんなに痛みを抱えて生きているかということです。戦争で人を殺してしまった、中国大陸で罪もない人を刺してしまったという軍人さんの苦しみもあるでしょうけれど、何もしなかった市民がこんな苦しみを六〇年間抱えて生きてこなければならなかったということを教えてもらいました。

その戦後六〇年の慰霊祭のときには、突然神戸出身の経済評論家である内橋克人さんが黙って会場にいらしてくださいました。彼は、自分の身代わりにある女性が死んでしまったという思いを持っている。その日彼は盲腸で入院したので、彼が座るべき防空壕の位置にお手伝いさんのきれいな優しいおばちゃんが座りました。その方は防空壕の直撃弾で亡くなった。その方のおかげで自分は生きている。六〇年間、そのことは一言も人に話さず、ずっと彼女の霊を弔い続けるだけだったけれども、六〇歳を過ぎてから、「私は話さなければいけない。いま日本に生きている、この地に生きている人たちはみんな、どこかで誰かの命の犠牲のもとに、今この命があるんだということをかみしめながら生きている」とおっしゃいました。

それから、ある一人の女性は当時電話交換手だったんですね。当時は電話、電報しか連絡手段のない世の中でしたから、電話交換の人たちは空襲中も勤務につかなければいけなかった。多くは女性だったわけですね。六人が一つの班になっていた。彼女の班は夜の仕事が終わりまして宿直室に向かったんです。その前に、もう今夜あたり神戸は危ないというのが神戸の人たちにはありましたから、「もし空襲になったら、どうしたらいいですか」と局長さんに聞きました。そうしたら、「現場に戻りなさい」と言うんです。現場には機器がいっぱいありますから、機器を守るためにいろいろな手段が講じられているから安全だということだったと思うんです。それだけしか教えてもらえなかった。宿直室に向かおうとしたら空襲が始まったんですね。

「ああいうふうにおっしゃったから、みんな、現場に戻ろう」と言って、自分の後ろに五人を引き連れて現場に戻ります。そうするとシャッターが下りているんですね。そこにはもう戻ることができない。こんなところにシャッターがあることは、彼女は知らなかったそうです。それで、そこから逃げようとするんですけれど、あまりにも煙がすごいのでみんなで一緒にかがんだんですね。でも、このままじゃいけないと思って、彼女は立ち上がって逃げ出したんです。そのときに後ろにいるみんなに、「ついておいで」と一言言うのを忘れた。気がついたらみんなが亡くなっていたという。彼女は「自分ひとり生き残った苦しみを抱えて生きてきた。同じような思いをもった人たちの集う慰霊祭に来れて、よかった」とおっしゃってくださいました。

それから、私たちは戦跡ウォークというのをやっています。神戸に戦争の傷跡はあまり残っていないですけれども、そこに集って、そこに立って、あるいは体験者のお話を聞いたりすることによって思い出そうとしています。あるところでは、

武蔵野のグループなんですけれども、あそこは中島工場という象徴的なものがありまして、戦争遺跡が随分あるんですね。戦争の記憶を語るのは人から物に変わっていったと言われた時期があるんです。でも、そのとき戦跡ウォークに参加された体験者の方が、「私たちは生きています。物ではありません。人なんです。私たちの言葉を聞いてください。私たちの見たことを聞いてください」とおっしゃったそうです。

人の記憶はあやふやなものもあります。子どもの記憶は不確かなものもあります。でも、その方たちの声と、それからいろいろ調査したこと、今ですと米軍資料ですとかを照らし合わせたものを一つにして、皆さんに伝えていくことがとても大切なことだと思っています。いっぱいお話ししたいことはあったんですけれど、とても感情的になって話せなくなりました。私たちは最初に『神戸空襲体験記』を出しました。これは絶版です。それから、二〇〇五年の年に『神戸大空襲――戦後60年から明日へ――』(7)という本を出しました。これもとても売れて、もう私の手元には在庫がありませんので、今日並べることができません。

二〇〇五年に知り合ったもう一人の方で、ご紹介したかったのは豊田和子さんという方です。私たちの神戸空襲の絵を描いてくださいました。描く人が優しいので、とても優しい絵なんです。空襲というつらい体験をどうしてこんなに優しいタッチで描いてくださるかと思うくらい優しいんです。こういう絵なんですけれど【図1】、絵巻物を描いてくださいました。本当に市民は助け合って、力いっぱいここで生きたんだ。そういう温かい生活がなくなってしまったんだということを、彼女は本当にすてきな絵にしてくださいました。それがまた別の本になりました。今日は豊田和子さんの『記憶のなかの神戸』(8)という、空襲前の神戸の生活と空襲を中心とした絵本を会場に並べさせていただいています。ぜひ手にとってご覧いただきたいと思います。

本当にとりとめもない話をしてしまいました。ありがとうございました。

【図1】絵・文　豊田和子『記憶の中の神戸』

(1) 神戸空襲を記録する会編『神戸空襲体験記』日光印刷出版社、一九七五年（絶版）。
(2) 神戸空襲を記録する会編『神戸大空襲』のじぎく文庫、一九七二年（絶版）。
(3) 君本昌久責任編集『日本の空襲』第六巻　近畿編、三省堂、一九八〇年。
(4) 現在、戦災資料室は神戸市立兵庫図書館に移管。
(5) ひょうご芸術文化センター制作『記録映画『炎の証言』大空襲の記録』兵庫県教職員組合、一九八二年。
(6) たかとう匡子『ヨシコが燃えた』澪標、二〇〇七年。
(7) 神戸空襲を記録する会編『神戸大空襲――戦後60年から明日へ――』神戸新聞総会出版センター、二〇〇五年。
(8) 絵・文　豊田和子『記憶の中の神戸』株式会社シーズ・プランニング、二〇〇七年。